

## 頂から見た世界一摩天楼の鉄骨組立工と愛国主義

南 修平

### はじめに

今年春から初夏にかけて1本のドキュメンタリー映画が日本で公開された。“Men at Lunch”（邦題『空中ランチ』）と題されたその映画は、2012年にアイルランド人のショーン（Sean）、エアモン（E'amon）というオ・クーロン兄弟（O' Cualain）によって作成され、トロント国際映画祭で公開されるや、アイルランド本国はもとより、アメリカで大きな反響を呼んだ。日本では一部小劇場で短期間しか上映されず、主要メディアに取り上げられることはほとんどなかった。しかし、アメリカではニューヨーク・タイムズやウォール・ストリート・ジャーナルなどの他、全米で広く科学・歴史などの学識を普及するスミソニアン協会もこの映画を取り上げた<sup>1</sup>。

なぜアイルランド製の小作品がアメリカでこれほどの反響を呼んだのだろうか。その理由を読み解くには、映画がフォーカスした1枚の写真にカギがある。映画は写真にまつわる、アメリカで長く謎とされてきた難問—梁の上に座っている労働者の特定に迫り、ついにその謎を解いたとして、観客にその回答を示すことをセールス・ポイントとしていた。その回答こそ、アメリカで今も語り継がれる「移民物語」に寄り添うものであり、多くの「アメリカ人」の琴線にふれたことが、映画を一躍メディアの寵児とした大きな原因なのである。

しかし、理由はそれだけではない。なぜなら、映画が語る移民物語により深く迫っていけば、そこからアメリカの草の根的愛国主義やそれを担う具体的な人々の姿や場所が明確に浮かび上がるからである。ここで言う「草の根的愛国主義」とは、国内外のアメリカ研究で活発に議論されてきた、移民や労働者階級など主流社会の周縁に存在する人々自らが「アメリカ人」として名乗りを上げ、包摂されようとする能動的表れを指す。本稿ではアメリカにおける愛国主義を体現する草の根の人々として、映画の主人公であるニューヨークの鉄骨組立工に焦点をあて<sup>2</sup>、名も無き草の根の人々がどのようにして「アメリカ人」として自らを意識するのかを検証する。そして、

ニューヨークという地に注目し、この地で摩天楼を築き上げてきた男たちが、今も同じ場所でアメリカの新たな象徴たる世界貿易センター（以下、WTC）を再建する過程において、草の根の愛国主義がどのように表れ、また、それと同時に、変化する可能性を併せ持つのかを明らかにする。

### 1. “Men at Lunch” から見える物語

映画の原題を直訳すれば「昼食中の男たち」となるだろうか。この原題に対する邦題は『空中ランチ』である。一見するといずれの題もそれが具体的に何を指すのか想像し難いかもしれないが、映画のポスターを見ればそれらの題に合点がいくであろう。

目も眩む高さに架けられた一本の梁の上に、命綱無しで11人の男たちが並んで弁当箱を広げて昼食をとっている。眼下には到底梁に届かないビル群が控え、男たちの背後には広大なセントラル・パークを確認でき、さらにその西側には朧げながらハドソン川も見える。男たちは地上約260メートル（850フィート）の地点に座しており、まさに空中で昼食をとっているように見えるのである。

映画ポスターに用いられた白黒写真は1932年9



写真① 映画『空中ランチ』のポスター  
©(株) Plankton

月20日に撮影され、場所はRCAビル（現GEビル）の69階である。RCAビルは当時マンハッタンを中心地区ミッドタウンにあるロックフェラー・センターの一角で建設過程にあった。写真は10月2日付のニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙に掲載され、“Lunch Atop a Skyscraper”という題がつけられた。

この写真が今もなお地元ニューヨークのみならず、アメリカを代表する1枚として記憶され続けている理由は、身の毛がよだつとてつもない高さの地点に、無防備な男たちが、あたかも地上にいるかの如く平然と昼食をとり、タバコに火をつけて休息しているという、あまりに不釣り合いな構図を見事に捉えている点にあることは言うまでもない。しかし、この写真が「アメリカ人」の心に残り続ける理由は技術的に優れた写真という芸術的価値のみにあるわけでは決してない。それはこの写真が持つ歴史的背景や梁に座る労働者への強い思い入れを抜きに説明することはできないのである。



写真② “Lunch Atop a Skyscraper”

©Bettmann/CORBIS/amanaimages

まずこの写真が撮られた1932年という時代を考えてみたい。1929年に株式市場で大暴落が起き、そのお膝元であったニューヨークは大恐慌の真っ只中にあった。恐慌は経済的弱者たる労働者階級の生活に甚大な影響を与えた。そのような苦しい時代のニューヨークにあって、高層ビルの建設は貴重な就業機会を提供したが、写真から容易に想像出来るように、その労働は命との引き換えも辞さない過酷な現場に身をおくことを意味した。

いつ死ぬかも分からないような現場で命を賭して働いていたのが、非ワсп系として主流社会から忌み嫌われてきたアイルランド系移民やその子孫であり、世紀転換期から1920年代前半を通じてニュー

ヨークに押し寄せていた南東欧からの移民であった。主流社会から冷たい視線を向けられていた人々にとって、それがたとえ命を失うかもしれない危険な職であっても、生きる術として何とか建設労働の職を確保することは必須であり、血縁者や地縁者でこうした職を融通し合って耐え忍んでいたのである。

「苦労に苦労を重ねていた移民たちが、梁の上の11人のように、日々黙々と働いていたからこそ、世界に追従を許さない大都市ニューヨークが生まれ、発展してきたのであり、厳しい地位から這い上がって、今の自分たちの生活もある。それはまさにアメリカの歴史そのものなのだ」—映画ではこうした語りが再三登場する。この語りの中心には、厳しい環境を必死で生きてきた移民労働者の姿が常にあり、懸命に労働する人々の日常がそこに座している。11人の男たちに向けられる強い想いは、黙々と働いて力強いアメリカを創ってきたという自負を持つ、移民の子孫たる「アメリカ人」一人一人の物語を反映しているからこそ、今もこの写真が「アメリカ人共通の記憶」として残り続ける1枚となっているのである。そしてそうした自負こそ、自らも国家に貢献してきたアメリカ人という、草の根の人々の間に浸透する愛国主義の源なのである。

それだけ強い想いを投影されている写真に対しては、自ずと梁の上の11人の男たちが一体どこの誰なのか、という素朴な疑問を引き起こした。実は被写体だけでなく、この写真を撮影したカメラマンも現在に至るまではっきりしておらず、撮影者をルイス・ハイン（Lewis Hine）とする誤解は未だに多い。ハインは、11人の男たちが働いていたRCAビルより2年早く完成を見ていたエンパイア・ステイト・ビルの建設過程を記録するために雇われていたカメラマンで、“Lunch Atop a Skyscraper”と並ぶ有名な写真を残していることが誤解の大きな原因であろう。また、撮影者をチャールズ・C・エベッツ（Charles Clyde Ebbets）とする説も長く信じられてきた。稀代の名ボクサーであるジャック・デンプシーの専属カメラマンを務めるなど、エベッツは当時すでに有名カメラマンとして名をはせており、ニューヨーク・タイムズなどにその作品が掲載されていた。様々な状況証拠からエベッツ説は有力ではあるものの、同じ日に撮影した11人の写真は“Lunch Atop a Skyscraper”以外にも存在し、それらの写真の角度など当時の技術から考えて、撮影時にカメラマンは複数いたという主張も根強く、未だに撮影者が特定できないのである<sup>3</sup>。

被写体についてもその特定は進まなかった。そも



そも誰が作業に従事していたか等の記録が残されていないため分からずじまいであった。映画は11人のうち新たな複数の証拠をチェックして2人の身元を確定し、さらに別の2人についても、有力な証言によってほぼ特定できたとの結論を出している。

興味深いのは、映画の中でも語られているように、多くの人が素性不詳の被写体を指して確たる証拠もないまま11人の誰かが自分の肉親だと主張して信じ切っているという現象である。かつてこの写真を含む膨大な写真の著作権を管理するコービス(Corbis Corporation)が調査者を雇い、新聞紙上で情報提供を呼びかけて被写体の労働者を特定するプロジェクトを始めた時、やはり自分の肉親だとする類の不確かな主張が多く寄せられたために作業を断念する事態も起きていた。映画 *Men at Lunch* の中でも、「誰もが彼ら(11人)の1人になりたがり、そう信じている」という場面が出てくるが、自分はその梁の上に座っていた労働者の子孫だと信じ、自称する者は絶えないのである。

なぜこうした現象が起こるかは、先に述べた草の根愛国主義から説明できよう。アメリカ建国とその発展の礎は、無数の名も無き移民による献身的かつ不屈の労働にあるのであって、苦難に耐え忍んで「偉大な、世界に誇るべき国」アメリカを創ってきた先達に、自分も同胞の1人としてできるだけ具体的・直接的に繋がってみたい、という強い一体感がこうした現象を引き起こしたのである。そこには、ルーツを同じ場所に求め、自らを先達の系統に組み入れることで、自身も共通の歴史を持つ資格があることを確認しようとする「同志愛」が現われており、人々が結びつくかたち一ボドナーが指摘するような「アメリカ人」としてつながりたいという、深い愛情の絆(bonds of affection)が見てとれる<sup>4</sup>。

そうした愛情の絆を感じさせる例として、梁に並んで座る労働者を題材にした派生物がたくさん生み出されていることが挙げられる。11人の労働者をハリウッド・スターたちに置き換えたパロディ系の合成写真やポスター類、様々なサイズのミニチュアなど商業的なアイテムも多く見受けられる一方で、労働者へのリスペクトをベースにした作品もつくられており、イタリア・シシリー島からアメリカへ渡ったマンハッタン在住の芸術家セルジオ・ファナリ(Sergio Furnari)による作品はその典型例であろう。「Lunchtime on a Skyscraper - A Tribute to America's Heroes」と題されたその作品は写真を模して創られた大型の彫刻物で、トレーラーからヴァンまでいろいろなサイズ的車に取り付け可能となっ

ており、鑑賞するだけでなく一緒に梁の上に座って撮影もできる<sup>5</sup>。ファナリは自ら車を駆って、ニューヨークをはじめ各地で移動展示を行い、自身が運営するウェブサイトから彼の作品を個人購入できるようにもしている。ファナリの作品を購入したニューヨーク州のあるホテルでは、敷地内に設置した他の彫刻物とともに梁の上に座る11人の労働者の彫刻をアメリカ国旗で飾り付け、林立するビル群を写した大きな1枚の板状の上に展示している<sup>6</sup>。

これらのいずれからも、匿名の労働者の献身的労働に対する強い尊敬の念が感じられる。特にファナリの場合、彼の故郷シシリー島は移民の主要な送先であり、その中の少なからぬ者が建設労働者となったことから、その思いは一層強い。ファナリは世紀転換期から1920年代を通じて多くのシシリー島出身者がニューヨークへ渡ったことを強く意識しており、だからこそ自らの作品に「アメリカの英雄へのトリビュート」というサブタイトルをつけているのである。それはまさに先人たちとのつながりを積極的に求める「愛情の絆」に他ならない。

「愛情の絆」はまた、11人の男たちがアメリカの、他にもないニューヨークという特定の場所にいることでさらに強化されている。20世紀初頭に大量移民の玄関口として多くの人々を引き寄せ、そこから未曾有の発展を遂げた大都市ニューヨークだからこそ、11人の労苦は他都市の移民労働者以上に忍ばれる根拠を持つ。命を賭して働かなければならない状況とは裏腹な、華美な世界を呈するに至ったニューヨークという対照的構図が明確に描けるからこそ、11人は「名も無きアメリカのヒーロー」として語り継がれる資格を持つのである。

そしてそれは、第2次大戦を経て他の追従を許さない大国アメリカが現出したことで、ニューヨークを超えたアメリカ、さらにはそれを中心として出来上がった世界という自意識へ容易につながっていく。映画がアメリカのメディアでブームとなり、人々の関心を惹きつけたのは、ニューヨークの移民労働者がアメリカ随一の大都市、ひいては世界のリーダーたるアメリカを創り上げたという自負が、映画によって改めて喚起されたからであり、今もなお困難を乗り越えて前に進み続けるニューヨークの姿を11人の労働者に重ね合わせたからではないだろうか。その意味で、草の根の人々に宿る愛国主義は未だ根強い移民物語の核心として受け継がれている。

## 2. 摩天楼の出現と鉄骨組立工(ironworkers)

本節では、映画がアメリカで話題を呼んだ理由を

さらに深く検討するために、11人の職種である鉄骨組立工とそれを取り巻く時代的背景に注目し、その関連を検討する。

一般に建設労働は特定の専門技術によって分かれ、塗装工 (painters)、電気工 (electrical workers)、板金工 (sheet metal workers)、石工 (marble cutter, 大理石関連の作業を専らとする) など多くの職種が存在する。職種間の境界は厳格に定められ、他の職種と明確に区別された専門技術を有する職人たちが建設現場の各工程を受け持つのである。

鉄骨組立工が建設熟練工として出現する契機となったのは、もともと木材や石が中心であった建築資材が、19世紀末までに鉄骨や鉄筋など鉄を素材とする加工品へ急激に変わっていったことにあった。これらを使った建設方法は旧来の工法を根本的に変化させ、強度が高く耐久性がある鉄材は、それまでには見られなかった高層ビルや吊橋という巨大な構造物を可能にしたのである。その中でニューヨークは大規模な建設事業が次々と展開され、鉄骨組立工は大いに必要とされる職種となった。

今やニューヨークのランドマークとなっている摩天楼や数々の美しい橋といった大型建設物の現場で常に先頭に立って危険な工事を担ってきたのが、鉄骨組立工であり、それは現在も同じである。これは他の職種は副次的で、危険が少ないことを意味するわけではない。あらゆる建設現場ではそれぞれ必要な作業工程に異なる専門技術を持つ労働者が従事し、どれか一つでも不手際があれば重大事故やトラブルを引き起こしかねない。建設現場全体には常に多くの危険が存在し、どの職種も自らの現場特有の事故に遭遇する可能性があった。

それでも、様々な職種の労働者が集まる建設現場にあって、鉄骨組立工は特別な存在であった。なぜ彼らが、いかなる意味で特別なのか。彼らが現場において「先頭に立つ」というのは、文字通りの意味であって、むしろ「先頭」ではなく「頂に立つ」と言い換えた方がより正確であろう。この「頂に立つ」労働が彼らに特別な位置を与えるのである。

別名「空のカウボーイ (Cowboys in the Sky)」と呼ばれることから想像できるように、鉄骨組立工の作業現場はあたかも空中であるかのごとき世界である。高層建築物を作り上げる際、鉄骨組立工は専らその枠を順に組み立てていく役割を担う。したがって彼らが働く周囲には壁が一切無く、常に自然環境と直接対峙しなければならない。そして、工事が進捗するに従って作業現場は上昇する。

マンハッタンをはじめ、ブロンクスを除くすべて

の地区が島で構成されるニューヨークでは利用できる土地面積が極めて限られ、自ずとビルの形状は細長くなり、削った鉛筆を立てたような、高さ250メートルから400メートルに迫るビルがマンハッタンに林立した。膨張し続けるニューヨークの象徴として姿を現した摩天楼の最高地点という尋常ならざる場所において、常に彼らの姿が確認されたからこそ、それは特別な存在として認知されたのである。

1898年にブルックリンなど他の地区を合併した世紀転換期のニューヨークでは、川や運河で分断されているマンハッタンと各地区を結ぶ交通路の確保と整備が必須の課題となっていた。人口が急増し、モノが溢れる状態を緩和するための、橋を架け、運河の下にトンネルを掘る作業は全米のいかなる都市よりも明らかに大きな比重を占めていた。その中で巨大な吊橋の建設も主たる仕事としていた鉄骨組立工の存在は一際目立つものだった。

交通路の整備では、マンハッタンと並んで急速に人口を増やしていたブルックリンとを結ぶ作業は特に重要とされた。元々ニューヨーク市ではなかったブルックリンが1898年の大合併で市の一部となって以来、マンハッタンとの物理的つながりがより求められたのである。ブルックリンとマンハッタンを結ぶ交通路は、合併以前に開通していたブルックリン・ブリッジ (1883) に続いてウィリアムズバーグ・ブリッジ (1903)、マンハッタン・ブリッジ (1909) が立て続きに完成したことで急速に整備が進んだ<sup>7</sup>。また、ブルックリンの他にマンハッタンとクイーンズを結ぶクイーンズボロ・ブリッジも1909年に完成していた。橋やトンネルが次々に開通することで鉄道や車の行き来が可能となり、マンハッタンを中心とした交通路の整備の飛躍的進歩はヒトとモノの流れを一層活発化させた。その結果、マンハッタンほどではないもののブルックリンにも高層ビルが建ち始め、1929年に完成したウィリアムズバーグ貯蓄銀行タワーは2010年まで長く同地区での高さ1位を誇ってきたのである<sup>8</sup>。

写真が撮影された1932年の前後の時代はニューヨーク、特にマンハッタンは空前の建設ラッシュにあった。ニューヨークを象徴する光景の一つが摩天楼—林立する高層ビル群であることは論を待たないが、これらのビル群が本格的に姿を現すようになったのは、1920年代から1930年代初頭にかけてであり、この期間を摩天楼が形成される一つのピークと捉えることが出来る。

そのことは例えば現在ニューヨーク市内に存在する高層ビルを高さの順でみれば一目瞭然となる。こ



の時代に建てられた4棟のビルが今もなお10位以内に入っていることから、いかに短期間のうちに巨大ビルが次々に出現したかという、その狂騒ぶりがうかがえる<sup>9</sup>。しかも10位以内にランク入りしているその他6棟のビルはすべて21世紀以降に建設されているものばかりなのである。1920-30年代のニューヨークの喧騒は、大量移民の流入による社会的混乱だけではなく、絶えることなく行われる高層ビルの工事現場から発せられる作業音によって、さらに騒々しさを増したのである。

目を見張る巨大建築物が次々と目の目を見る一方で、当時の高層建築物の現場は信じがたいほど危険であった。今では建設中のビルの頂上に大型クレーンが設置され、クレーンを巧みに操作するオペレーターと現場本部、階下で鉄骨や建築材料の揚げ降ろしを担う作業員らが、高度な通信システムを駆使して緊密に連絡を取り、慎重かつスピーディーに作業を進めているが、もちろん1920-30年代にはそうした設備はなかった。鉄骨の吊り上げ・吊り下ろしはDerrick Bellmanと言われる専門職人が構内に設置されたベルの音を巧みに鳴らし分け、様々なサインを体で表現して階下や階上にいる労働者とクレーンを操作するオペレーターに指示を出すことで相互が連携して作業を行えるようになっていた。

建設現場において鉄骨組立工の熟練技術に依存する割合は現在でも非常に高いが、この当時は格段に高く、彼らの熟練技術によってビルの建設は支えられており、その存在は現場で圧倒的であった。現場では命綱なしで作業を行うため落下事故が絶えず起こり、また、高層になればなるほど現場は強風や雨・雪などに晒され、夏は灼熱の太陽に照らされた鉄骨が猛烈な温度を保つため、火傷は日常茶飯事であった。こうした過酷な自然環境に加え、資材の落下や吊り下げ物の直撃、荷崩れなどの事故も頻発し、様々な種類の死傷事故によって多くの犠牲を払いながら摩天楼が建設されたのである<sup>10</sup>。

鉄骨組立工は来る日も来る日も太陽や風雪雨、強風に晒されながら黙々と頂へ鉄骨を運び上げては、それらをつなぎ合わせてきた。現在のような緻密な安全管理も、高性能なクレーンも欠いた中、命綱もヘルメットも無しに作業を行わねばならなかった現場では多くの人命が失われていた。写真に写る11人の男たちの日常的な労働は、まさにそのような環境にあった。

高層ビルの建設ラッシュによって急速に街の姿を変えていたニューヨークでは、当時その変化を記録する写真が盛んに撮られており、新聞や雑誌の専属

カメラマンによる作品が頻繁に掲載されていた。映画のモチーフになった撮影者不明の“Lunch Atop a Skyscraper”はその中で最も有名な1枚であるが、他にも人々の心を捉えた多くの有名な作品が存在している。その一つが“Icarus Atop Empire State Building”である。20世紀初頭の移民労働者やその家族を記録し、中でも働く子どもたちにフォーカスした作品で知られるルイス・ハインによるこの写真では、エンパイア・ステイト・ビル（1931年完成）の建設に従事する1人の労働者が記録されている。

高層ビルの頂上付近でケーブルをつなぐために、ケーブルに体を巻きつけるようにしながら上方へ手を伸ばす労働者の背景にはニューヨーク市内が控えている。彼の地点からは市内の光景がいかなる障害物もなく容易に一望出来ることから、その圧倒的な高さが見る者にしっかりと伝わってくる。ケーブルに足を器用に絡ませて作業をしている当の労働者は、ヘルメットはおろか命綱さえつけておらず、太いケーブルをつかむ彼の手は素手である。オーヴァーオールに半袖シャツという素朴なスタイルの労働者が、そびえ立つ壮大な建築物に挑むかのような作業を、眼下にニューヨーク市内を見渡せるとてつもない高所でやってのけている非対称な構図こそ、写真最大の魅力である。同時に、誰の目にも危険であることが明白な環境の中で働く者がいるという事実こそ、その者に対する驚嘆と尊敬の感情を生まざるにはおかないのであり、鉄骨組立工が働く姿はそれだけ特別な説得力を有したのである。



写真③ “Icarus Atop Empire State Building”

Courtesy of George Eastman House, International Museum of Photography and Film.

現在ニューヨーク市内に拠点を置く鉄骨組立工労組は Local 40 (マンハッタン) と Local 361 (ブルックリン、クイーンズ) の 2 労組である。このうちマンハッタンを拠点にする Local 40 のトップ職にあたるビジネス・マネージャーはロバート・ウォルッシュ (Robert Walsh) が務めている。1944 年生まれのロバートは 6 歳違いの弟エドワードとともに父と同じ鉄骨組立工になった。父から息子に職が受け継がれる血縁・地縁を中心とする労働文化は移民コミュニティの中では重要な就業手段であるとともに、アイルランド系移民などカトリック系の家庭における父と子をつなぐ根強い絆でもあった。小さい頃から親に連れられて現場を訪れ、そこで労働者仲間から可愛がられた息子たちは、迷うことなく父や兄の跡を追ったのである。

ウォルッシュ兄弟の父は作業中の事故で命を落としており、ロバート自身もヴェラザーノ・ナロウズ・ブリッジの建設工事に従事した際、2 度の落下事故を経験したという。幸い安全ネットにかかったため命は助かったが、同時期に作業に当たっていた 1 人の労働者のケースは悲惨だった<sup>11</sup>。落下したものの、何とか作業用通路につかまって助けを求めたが、不幸にも助けが間に合わず力尽きて落下し、亡くなったのである<sup>12</sup>。助けを呼ぶ仲間が落下していく様子を目の前で目撃しなければならないほど、現場は生死が常にリアルに迫ってくる過酷な環境であった。そのような日常だからこそ、お互いに命を預け合って作業をする彼らの仲間意識はことさら強く、他の建設業の職種よりもその傾向は一段と高かった。

彼らが特別な位置にあることは何よりも鉄骨組立工が自任している。全米鉄骨組立工労組は自分たちについて以下のように語る。

「鉄骨組立工がいなければニューヨーク、シカゴ、ケベック、ロサンゼルスのような街は今と全く違って見えるだろう。摩天楼も橋もオフィス・ビルもない。交通システムも全く異なっているだろう。我々が作った橋を抜きに、どうやって何百万もの通勤客は仕事に行くというのだろうか。枠組みや構造物をつくる鉄骨組立工なしではいかなる他の建設労働者も自分の仕事をするにはできない。だからこそ、我々鉄骨組立工は建設業に従事する職人の中で最も尊敬されるのである」(全米鉄骨組立工労組オフィシャル・ウェブサイト “Who We Are” より、著者訳)<sup>13</sup>

以上見てきたように、映画がアメリカで評判を呼

んだ理由には、主人公たる 11 人が、空前の建設ブームに湧いた華やかなりしニューヨークで、頂に立ち、犠牲を払いながら摩天楼を創り出したという、具体的な場所と時代、彼らの特殊な労働環境という、個別的な事情が深く関係していた。通常誰も足を踏み入れない地点で、多くの代償を払いながら黙々と働き続けてきた労働の結果、壮大な建築物で満たされた、世界に誇れる巨大都市ニューヨークが現れたという分かりやすい図式が、鉄骨組立工自身はもとより、彼らをまなざす人々の思いを強め、様々な方面で映画が話題を集めたのである。移民物語を貫く草の根愛国主義には、こうした特殊かつ極めて具体的な労働の在り方が含まれているのである。

### 3. 継続する物語—匿名性から具体性へ

前述した有名な 2 枚の写真以後も、頂で活躍する鉄骨組立工に対して同様のまなざしが向けられている。ノンフィクション作家ゲイ・タリーズ (Gay Talese) が 1964 年に著した *The Bridge: The Building of the Verrazano Narrows Bridge* は、当時世界最長の吊橋となったヴェラザーノ・ナロウズ・ブリッジを題材としており、その記述は橋を建設した鉄骨組立工にフォーカスされている<sup>14</sup>。鉄骨組立工は技術的に共通する部分が多い巨大な橋の頂でもその熟練技を大いに発揮した。

タリーズは橋をつくりあげる鉄骨組立工を取り上げた動機について、2003 年の新装版に付した序文の中で明確に述べている。彼が初めてニューヨークにやって来た時、その心に浮かんだのは、誰がこの街々を結び付けている橋をつくったのだろうか？ということであった。この序文には、イタリア系アメリカ人であることを強く意識するタリーズの、自らの来歴と共通する部分を多く有するであろう鉄骨組立工への強い思いが十分に表れている。

「建築物の名前や有名な構造を持つそれらに関わった主要な技術者を知っていることは多い。しかし、高所に上って危険な場所で作業をした男たちは誰なのか、エンパイア・ステイト・ビルの鉄骨を組み立ててそれらをつないだり、ブルックリン・ブリッジにケーブルを渡した男たちが誰なのかについては、書物や歴史史料、あるいはこれら有名なランドマークに関して書かれた様々なものには記録されていないのである。私が 1962 年にこの書物を書こうと決心した時、そうした思いは常に念頭にあった。労働者の名前や来歴を記録し、この偉大な事業の歴史の



中に、彼らがいるべき場所を確立するということがある」(著者訳)<sup>15</sup>

同書には橋の建設に携わる労働者を記録し続けた写真家集団マグナムの一員ブルース・デヴィッドソン(Bruce Davidson)の作品が用いられ、タリーズによる個々の労働者に関する詳細な記述とデヴィッドソンの写真が合わさることによって、より鮮明に労働者の姿が浮かび上がる効果をもたらしている。

1930年代に撮影された写真では労働者の匿名性が特徴であったが、この時代になると、逆に彼らの来歴や働く現場の様子、それぞれが仕事に抱く思いが詳細に記録されるようになった。平然と危険な作業をこなしていた1920-30年代における労働者へのリスペクトは、第2次大戦を経て「世界随一の強国」にのし上がった1960年代初頭のアメリカを下から支える者たちに対して、より具体的な形で扱われるようになったのである。それは匿名で捉えられてきた労働者が、明確に「偉大な国アメリカ」の物語に組み入れられるという意味も伴っていた。

そこから約40年を経た21世紀、世界貿易センター(WTC)のツイン・タワー崩壊という衝撃的な事件は、否応なく鉄骨組立工への関心を高まらせた。鉄骨組立工に扱われてきたリスペクトの基調は、2006年に放送されたTVドキュメンタリー作品“Metal of Honor”でも保持された。同作品は、WTC崩壊直後から命の危険を顧みることなく即座に現場に結集し、有毒物質を含む粉塵が舞い、未だ煙が燻る中で大量の瓦礫と格闘しながら、解体・撤去作業、行方不明者の捜索作業に奮闘した鉄骨組立工の姿を追ったものである。事件が起こるまで別の現場で働いていた労働者たちは、黒煙を上げ崩壊に向かうツイン・タワーを目の当たりにすると、いてもたってもいられなくなり、多くが自分の仕事を放り出してWTCへ駆けつけたのだった<sup>16</sup>。

映像の中で労働者はなぜここに駆け付けたのか、WTCは自分にとってどんな存在だったのかを語っている。映像というこれまでとは違った媒体で捉えられた鉄骨組立工の様子は、もはや書物での記述や写真という静止状態から自らの想像力を喚起する必要はなく、より直接的でメッセージ性の強い効果を持っていた。視聴者は映像を見て労働者の生の声を聞き、彼らの顔や姿を確認することで、より「リアルな」労働者に出会うことになったのである。

今もなお再建事業が続くWTCの建設現場で働く鉄骨組立工の声や姿は継続的にメディアによって発信され続けている。アメリカの大手放送局NBCが

運営するケーブル放送の天気予報専門番組The Weather Channelは2012年5月から2回のシリーズに分けてドキュメンタリー番組“Iron Men”を放送し、現場の鉄骨組立工に密着してその様子を報じた。番組は天気予報の放送会社ということもあってか、いかなる気象条件でも「タフに仕事をする労働者たち」という側面が強調され、WTCの再建現場の様子を中心に、他の現場での仕事や、仕事以外の姿も捉えている。ここでもやはりその基調は過酷な作業環境で働く者たちへの賛歌である。

「どんな天気でも鉄骨組立工は地上数百フィートの狭い梁の上を歩く。高ければ高いほど風は強くなる中で。風、雪、雨と闘うだけでなく、彼らは骨をも凍らせる東海岸の寒さと闘わねばならない。毎日彼らは自らの命を仲間に預ける一危険や緊張を感じつつも打ち破ることのできない絆を創りながら」(番組オフィシャル・ウェブサイトより、著者訳)<sup>17</sup>

摩天楼を建設してきた鉄骨組立工に対するイメージや彼らに向けられるまなざしは、摩天楼が林立し始めた1920-30年代からWTCの再建という現在に至るまで、より具体性を帯びながらリスペクトを払うその基調が保持され続けていると言って良い。そこには、危険な現場で働く労働者へのリスペクトと感謝の念だけでなく、「世界の都市」ニューヨークを創り上げ、それを維持・発展させ、恐ろしい攻撃を受けた後もめげることなく、壮大な摩天楼を新たに建設し、力強く前へ進み続けるニューヨークを地道に支え続けているという、ニューヨークという地に根差した特別な意識が感じられるのである。特定の都市の「偉大さ」や「強さ」を前面に出し、それを創り上げてきた働く者に対する一貫したポジティブな基調は、アメリカの他都市を考えてみてもニューヨークが突出しており、世界の他地域に目を向けても同様の例を速やかに挙げることは難しい。

その理由を考えてみれば、それは、まさにニューヨークがそのままアメリカの「強さ」「偉大さ」を象徴する拠点として機能し、表象されてきたからであり、その実体的根拠の一つが国内外に例のない高層ビル群—摩天楼であるという図式が成立しているからではないだろうか。ニューヨークは常に世界の政治・経済・文化の中心地として特別な地位を得ているという自負は、アメリカ全体で共有されてきた大国意識とつながり、容易にそれと重ねることが可能なものだったのである。

その過剰なまでの自意識は、頂で働く鉄骨組立工

のプライドの源であり、常に先頭に立ってタフな現場で働いてきた労働者を、多くの人々がリスペクトする根拠でもあった。ここで創り出されているのは、ニューヨークという特定の場における草の根レベルに共通した具体的な「アメリカ人」としての国民意識であり、世界一の偉大な都市を支えているという愛国的自負なのである。

#### 4. WTC 建設をめぐるポリティクス

その「世界一」の都市ニューヨークを象徴してきた高層ビルの一つが WTC のツイン・タワーであった。それらは 9・11 の恐ろしい事態によって一旦すべて崩壊に至ったものの、再建へ向かって着実な取り組みが進んでいることで、そのイメージは以前よりもさらに増幅され、強烈な自意識の形成に資するものとなっている。

しかし、今でこそポジティブなイメージで捉えられる WTC ではあるが、建設当時はその是非をめぐって激しい論争が交わされた日くつきの建物であったことは注意を要する。なぜなら、論争的な建物であったものがいかにしてアメリカ人の愛国的シンボルとなったのかを検証するにあたって、そこから何が振り落とされ、共通の意味を持つものとして「純化」されていったのかが見て取れるからである。つまりそれは、「アメリカ国民」としての境界線—そこに包摂されようとする者とそうでない、あるいはその境界線上にいる者の存在を浮かび上がらせていくことでもある。そこでまず本節では、WTC の建設当時の論争的状况を考察し、それが 9・11 以前ではどのような存在であったのかを明らかにする。

第 2 次大戦以前から WTC の建設計画はあったものの、政治レベルで具体的な議論の俎上に載り始めたのは 1960 年代に入ってからであった。1962 年にニューヨーク州とニュージャージー州双方の州議会で合意が成立したことで WTC の運営主体が両州にまたがる州際機関ニューヨーク/ニュージャージー港湾局 (Port Authority of New York and New Jersey) になることが決定し、以後建設開始に向けた手続きが進められる環境が整った。しかし、建設地をどこにするかという基本的な問題からすでに各方面で対立が生じ、特に深刻なレベルに達したのがニューヨーク市とニュージャージー州、港湾局の間の対立であった。

加えて、そもそも建設自体に反対する声も大きく、とりわけ地元ニューヨークの財界から激しい反対の声が上がり、エンパイア・ステイト・ビルのオーナ

ーや建設予定地周辺の土地所有者ら経済人で構成される「合理的 WTC を求める委員会」は、一致して計画の見直しを求めた<sup>18</sup>。当局間の調整が本格化する 1966 年に入ってからにはさらに同委員会の焦りが増し、港湾局を相手に訴訟を起こし、市に対しては公聴会で建設計画を見直すように求めるなど、建設推進側に強いプレッシャーをかけた<sup>19</sup>。

当時世界一の高さを誇っていたエンパイア・ステイト・ビルにとって、WTC の建設は介入必至の事柄であった。同ビルの頂上にはテレビや FM 放送のためにアンテナが設置されていたが、それらのほとんどが新たに「世界一高いビル」になる予定の WTC の頂へ移設される計画は、実際に生じる可能性が懸念された電波障害の問題とともに盛んに議論された。これは単にアンテナの移動という物理的な問題にとどまらず、「世界一」の称号に関わる名誉の問題でもあり、そのブランド喪失が同ビルを中心に活況を呈してきた周囲の環境にも影響し、アンテナとともにその活力も WTC 方面に移ってしまうという焦燥感が生じていたのである<sup>20</sup>。こうした財界からの反対以外にも、騒音や大気汚染、鳥類の生息環境悪化を懸念する声があり、計画の推進は両州の合意成立後も決して容易ではなかった。

一方、事業を推進する側の最大の対立要因は、建設をめぐる利益分配や費用負担という財政面であった。ニュージャージー州側は当初より建設予定地が同州とは逆方向に位置するマンハッタンの東側になることを強く警戒し、ハドソン川に面した地点にすることを求めている。この背景にはニュージャージー州とマンハッタン (ペン・ステーション) を結んでいたハドソン&マンハッタン鉄道に関連する深刻な問題が存在していた。新たなトンネルや橋の開通によって車による往来が主となったことで同鉄道の乗客が激減し、1954 年に破産に至っていたのである。破産後も鉄道の運営は州が主体となって続けられていたが、明らかな「お荷物」と化しており、WTC 建設を機に鉄道負債問題をどうにか良い方向へシフトさせ、経済を上向かせるきっかけにしたいというのがニュージャージー州の思惑であった。

一方ニューヨーク市側も深刻な事情を抱えていた。1966 年新たに市長に就任していたジョン・リンジー (John V. Lindsay) 市政にとって当面の課題は、ますます厳しさを増していた財政危機を脱することであり、リンジーはできるだけ市の負担を軽くしつつ、WTC 建設というビッグ・プロジェクトから最大限の利益を得ようと考えていた。それは例えば WTC 建設に乗じ、港湾局の負担によってマンハッ



タンの港湾設備や建設地周辺地域のリニューアルを行わせるなど、可能な限りニュージャージー州側に港湾局の予算が使われないようにすることだった。

ハドソン川の両岸に位置する州と市の間で文字通り板挟みになった港湾局は難しい調整を迫られ、合意を取り付けるための交渉は長期化した。交渉はニュージャージー州と港湾局、ニューヨーク市それぞれがお互いを非難しあう様相を呈し、合意の可能性はなかなか見えなかった<sup>21</sup>。中でも対立を深めていたのは市と港湾局であった。市当局は市内で WTC を運営する港湾局に対して税金の支払いを求めない代わりに、別の収入を市にもたらすことを要求し続けていたが、港湾局はその要求を拒み、それが最大の対立の種となっていた。市は港湾局を「1 インチたりとも歩み寄ろうとしない」と批判し、それに対して港湾局は「リンジーは何度も自分の言葉に背き、約束を守らない」と激しく応酬した<sup>22</sup>。

そのような事態に痺れを切らし始めたのは、WTC 建設計画に大きな期待をかけていた建設労組であった。第2次大戦後から1960年代半ばにかけてニューヨークは一大建設ブームが続き、新規の住宅や国連本部ビルの建設、万博関連事業、JFK 空港の大幅拡張、シェイ・スタジアム新設等ビッグ・プロジェクトが相次いだ。しかし、公共事業に依存を深めることで雇用を確保してきた建設労組も、長年良好な関係を保ってきた市長ワグナーが市庁舎を去ってしまい、その後「市政刷新」を掲げて颯爽とやってきたリンジーとは当初から厳しい緊張関係が続いていた。特に建設関連の予算の扱いを、建設熟練職から排除されてきたマイノリティ労働者の受け入れを労組側が進めるか否かで決めようとするリンジーのリンケージ政治は、建設労組にとって最もストレスのたまる「邪道な」行為と捉えられていた。

公民権運動の高揚という変革の波に乗り、運動体やその周辺から大きな期待を受け、実際にそれらを支持基盤にしてきたリンジーの存在は建設労組にとって厄介以外の何ものでもなかった。自らを取り巻く政治経済状況に積極的な要素が見出せない中であるからこそ、WTC 建設計画は数少ない大きなチャンスであり、当局同士の争いがもとで交渉が進まず、建設が遅れている事態は許容できるものではなかったのである。それゆえに、ニューヨークの各建設労組を組織していた上部団体であるニューヨーク建設労組 (BCTC) は、事態の早期進展を求めてストライキの圧力をかけ<sup>23</sup>、組織内でもたびたび怒りに満ちた決議を上げて憤りを露わにした<sup>24</sup>。

最終的にこれらの対立は、相互が譲歩してようや

く合意条件がつくられていった。懸案となっていたニュージャージー州の赤字鉄道問題は、その運営権を港湾局に移すことで解消された。港湾局は WTC の立地を、ニュージャージー州が求め、現在地でもあるハドソン川サイドにすることを決定し、さらに新たに港湾局が運営することになる鉄道 (現 PATH Train) のターミナル駅も同所にリニューアル・オープンさせ、これによってマンハッタンへのアクセスが改善される州側に大きな配慮を見せた。

一方、より深刻な対立に発展していたニューヨーク市に対しては、市が求めていた税金に変わる収入源を港湾局が確保することで落ち着きをみせるようになった<sup>25</sup>。港湾局はビルに入居する事業者が支払うリース料から、毎年市へ分配金を支払うことを提案し、それによってついに両者は合意を阻んできた最大の課題を突破することができたのである。

市側の頑なな態度に不信感を募らせていたニュージャージー州もようやく合意に応じ、市と港湾局の正式な合意が交わされ、こうして WTC の建設はついに画期的な前進を迎えるに至った<sup>26</sup>。しかし、この時点で当初から問題になっていた莫大な建設費用の見積額はさらに膨れ上がり、5億7500万ドルにまで達していた。

紆余曲折を経て工事が開始され、まずノース・タワーの建設が1968年8月に始まり、続いて1969年1月からサウス・タワーが着手された。そしてテナントの移転も終えたところで1973年4月4日、両ビル揃ってのオープニング・セレモニーが行われ、長きに渡った構想はついに現実となったのである。

以上見てきたように、WTC の完成までの過程は決して万人が支持する中で進められたとは到底言えるものではなかった。世界一の高さを持つビルとして「第1位」の座を獲得したこととは裏腹に、莫大な費用をかけて建設することにかほどの価値があるのかという批判は常につきまとい、そうした批判は出口の見えない不況と財政危機に陥り始めたアメリカ社会を象徴するものでもあった。第2次大戦終了直後、冷戦体制の中で他に追随を許さない資本主義諸国の盟主としてソヴィエト政権と対峙してきた「力強さ」は、WTC の建設が始められた頃にはすでにヴェトナム戦争における苦戦で説得力を失い、高らかに掲げられていた自由や民主主義の理念も、公民権運動の高揚でその実態が露わになり、あちこちでほころびを隠せずにいた。

「高さ世界一」という壮大な WTC 建設計画は、皮肉にも、「世界一」の強国アメリカの斜陽と重なって合っていた。「世界一」になることよりも、いか

にしてこの計画を利用し、蓄積された赤字財政を改善できるのが当事者の本音であった。建設計画の当事者たる公権力が見せた中傷合戦や責任のなすりつけ合いは、ニューヨークのとある地点での建設事業という狭隘な地理的範囲を超えた、帝国アメリカが直面していた事態そのものであり、世界の中でその相対的地位を低下させた状況が、ローカルな地にもはっきりと訪れていたことを示していたのである。

## 5. WTC の崩壊とその再建—変化する鉄骨組立工の世界

2011年9月11日、2機の旅客機がWTCのツイン・タワーに突入した衝撃的事件は、もともと極めて論争的な建物群であったWTCが愛国主義のシンボルとしてその姿だけでなく、それが持っていた意味を根本的に変える契機となった。WTCサイトはツイン・タワーの他、これらに遅れて建設が始まった5棟を加えたビル群であったが、ツイン・タワーが崩壊する際の瓦礫で破壊されたり、火災が延焼する等してすべてのビルが失われた。

未曾有の事態に直面したアメリカ社会では、「制裁」を求める声が燎原の火のごとく広がり、星条旗が街に溢れ、ことあるごとに「ゴッド・ブレス・アメリカ」が歌われるようになった。WTCサイトは愛国主義のシンボルとして聖地化され、そこから発信される様々な情報や光景が更にそうした傾向を強めた。そしてその中に、ツイン・タワー崩壊直後からWTCサイトに結集し、すぐに瓦礫撤去や行方不明者の捜索活動に加わった鉄骨組立工の姿があった。本節では、鉄骨組立工がWTC崩壊によって一気に脚光を浴びる場面が増えた中で、そこに見出される愛国主義の根拠を述べるとともに、彼らが直面する現実との間にあるギャップの意味を論じる。

危険な現場で壮大な建築物を徐々に積み上げていく労働過程は建築物が大きければ大きいほど時間も労力も要した。鉄骨組立工は、現場に通いながらだんだんと完成に向かって建物が上方へ伸びていく過程を高い誇りとともに深く愛した。

長い過程を要するビル建設では、その画期として独特の儀式が存在する。落成式 (Topping Out) と言われるそれは労働者にとって自身と仲間をいつになく誇らしく思える瞬間であった。落成式は建物が最高地点に達したあたりで行われるもので、建設に携わった鉄骨組立工をはじめ、事業主や地元政治家が参加し、頂をなす最後の梁を国旗で飾り、参加者各々がその梁にサインした後、取り付けに向けて持

ち上げられていく光景を一同で眺めるのである。

信頼できる仲間とともに、自らが命を懸けて建てたものだからこそ、彼らはそれに対して強い思い入れを持つ。その愛してやまないビルがハイジャックされた飛行機の突入によってすべて崩れ去ってしまったのが9/11であった。未曾有の事態に遭遇した直後から建設労働者が現場に素早く結集した背景には、WTCのツイン・タワーをはじめ数々の高層ビル建設に直接携わってきた自らの来歴があり、お互い命を預け合ってきた仲間とともに落成式で、その労苦を再確認する独特の労働文化が深く影響していた。

崩壊以後のWTC現場と建設労働者は、困難に立ち向かうアイコンとして登場することが多くなっていった。崩壊現場は有毒物質が蔓延するだけでなく、瓦礫の倒壊や至るところに突き出た梁や鉄筋などの鋭い突起物が無数にあり、極めて危険な現場であることは明らかだったが、それにもかかわらず積極的に現場へ向かって黙々と作業に従事する鉄骨組立工ら建設労働者の献身性は、ショックに打ちひしがれていた人々の心を捉える要素を十分持ち、未曾有の危機に「臆することなく立ち向かうアメリカ」を体現する姿として見事に当てはまった。

崩壊から10数年を経た今、再建事業は鉄骨組立工ら建設労働者の手によって着々と進められている。2006年5月に7 WTCがオープンすると、2013年11月には4 WTCがそれに続き、2014年11月3日には高さ546mを超す1 WTCがオープンした。

ニューヨークのみならず全米一の高さを誇る1 WTCの建設現場では、2012年6月14日に一大イベントが行われた。落成式が間近に迫る同ビルの現場にオバマ大統領夫妻、ニューヨーク市長ブルームバーグ (Michael Bloomberg)、ニューヨーク州知事クオモ (Andrew Cuomo)、ニュージャージー州知事クリスティー (Chris Christie) が訪れ、労働者が背後で見守る中、全員が最高地点に取り付けられる予定の梁にサインしたのである。オバマは自身の署名の他、“We remember, We rebuild, We come back stronger!” というメッセージも記していた。

「より強くなる」というポジティブなメッセージは、1 WTCがオープンし、以前のWTCビルを遙かに上回る高さを得て再度全米一の称号を取り戻したことで現実となった。大統領らの現場訪問とそこでの儀式をともに迎えたことで、WTC再建に携わる鉄骨組立工ら建設労働者の愛国的働きぶりは国家的なお墨付きを得たのであり、国家の意志を体現す



る者として明確に意味を付与されたのである。

ただし、その愛国主義の内容は単純ではない。なぜなら、かつて近親者や同郷者など血縁・地縁者のみで構成されてきた鉄骨組立工の世界は、公民権運動以後の権利意識の高揚とそれらの要求が社会で制度化されることによって、変容を余儀なくされているからである。もちろん血縁・地縁が未だ強い世界であることは、鉄骨組立工を含む建設労組全般の幹部職がそうした者の間で引き継がれていることを見ても良く分かる。しかしそれでもなお、近親者や同郷者だけで職を占めるような、時代の流れに抗する路線はとり得ず、数は少なくとも外部の者の中に入れていく変化の波は確実に及んでいる。

3節でふれたケーブル放送番組 Iron Men では特定の鉄骨組立工に密着するスタイルがとられているが、その中には女性の鉄骨組立工も含まれ、番組ではビルの建設現場で働く複数の女性労働者が登場する。また1 WTC のセレモニーでも、梁にサインするオバマらの背後でそれを見守る鉄骨組立工の中に1人の黒人女性が含まれていた。サインを終えたオバマは振り向くと、背後に並んでいた鉄骨組立工と次々に握手を交わし、彼女とも抱擁して同じように握手を交わした。このような現象は、数ある建設業の職種の中で最も女性が就業することが困難であった鉄骨組立工独自の世界が、変わらざるを得ない段階に来ていることを示している<sup>27</sup>。

しかし、「再び強くなって戻ってくる」アメリカをアピールする場で、にこやかにオバマに応じた黒人女性鉄骨組立工のシーンは、古い境界を破って中に入ってきたマイノリティや女性たちが、その境界の枠組みをより外側に押し広げつつも、他方で「世界のトップであり続けるべきアメリカ人」の一員として、その隊列に包摂された側面も同時に有している。ただし、包摂される傾向のみを支配的とする結論は早計だろう。なぜなら、セレモニーに登場する労働者たちはニューヨークの組織労働者の一部に過ぎず、黒人の女性鉄骨組立工となればさらに限定され、他方で組織労働者の枠外には未組織労働者がそれ以上に大勢控えているからである。

そして注目すべきは、今やニューヨークでは組織労働運動でもその中心がマイノリティに移行してきているという傾向である<sup>28</sup>。もちろん、マイノリティ労働者があらゆる職種に均等に存在しているわけではない。しかし、ニューヨーク市内すべての建設労働者のうち、45%はアメリカ国籍を有していないという報告もある<sup>29</sup>。このような多様化の進展は、旧来の組織の在り方や運動の論理に、時としてドラ

スティックな変化を求める可能性をはらんでいる。したがって、既存の組織や体制に変化を促す要素が一概に国家の論理と調和していくとは、決して言えないのである。

## おわりに

鉄骨組立工は何にも妨げられない高みに立つ特異な経験を労働から得てきた。頂を制し、特別な地点から下方を眺めることは、そのまま「ニューヨークの偉大さ」＝「世界の頂点に立つアメリカ」という愛国的意識とつながっていた。今後 WTC の再建で新しいビルが立つたびに、「偉大な、前に進むアメリカ」が再確認されようとするだろう。しかし、長く一部の者だけで構成されてきた鉄骨組立工を含む労組全体が組織率の低下に喘ぎ、資本との対抗力を弱体化させている現在、新たな人々をその内部に含めていかなければならないこともまた現実なのである。

愛国主義の聖地として WTC の崩壊現場を「グラウンド・ゼロ」と呼ぶのであれば、「頂」ではなく、敢えてゼロの地点から見える光景に注意を払うことが必要である。周囲には多様な人々が働き、存在していることを確認できるだろう。それは、鉄骨組立工が有してきた草の根的な愛国主義—ひいては9/11によって過熱化したアメリカの愛国主義を冷静に見つめ直す機会につながるのではないだろうか。

映画 Men at Lunch が共感を呼んだ源はアメリカ社会の底流をなす移民物語—草の根愛国主義である。その物語は、頂には注目しても（ヨーロッパ系移民の男性労働者）、その眼下には注意を向けておらず、下で働く大多数の人々は極めて曖昧な存在でしかなかった。しかし、その「曖昧な人々」—黒人やヒスパニックなどのマイノリティや女性が現場をともにする存在としてますます無視できなくなっている現在、アメリカ社会がこれらの人々にいかなる視線を向け、またこれらの人々がそれに応ずるのか。既存の枠が拡大し、そこに包摂されることで国民としての新たな物語を紡ぎ出すのか、それともあるべき価値観をめぐってより多様で論争的な状況が強まるのか。WTC をはじめとする建設現場で働くニューヨークの鉄骨組立工は、現在進行形で進む草の根愛国主義の変化を見据えていく上で引き続き重要な存在なのである。

1 映画の反響は大きく、筆者が調査した範囲では、アイルランドやアメリカ以外に、イギリス (Daily Mail

- Telegraph)、カナダ (National Post)、スウェーデン (Local) でも取り上げられている。
- 2 本論文では便宜上「ニューヨーク」と表記するものはすべてニューヨーク市を指し、地域の区別が必要な際のみ「市」「州」を付するものとする。
  - 3 このことについて言及した各種記事は数多い。以下、主なものを列挙する。Meagan Gambino, "Lunch Atop a Skyscraper Photograph: The Story Behind the Famous Shot," *Smithsonian.com*, Sept. 19, 2012; Philip Caufield, "Just a publicity stunt? As iconic photo 'Lunch Atop a Skyscraper' turns 80, questions arise about its origin," *New York Daily News*, Sept. 20, 2012; John Anderson, "How a Galway Pub Led to a Skyscraper," *New York Times*, November 8, 2012.
  - 4 John Bodnar ed., *Bonds of Affection: Americans Define their Patriotism* (Princeton: Princeton University Press, 1996), introduction.
  - 5 その様子は Youtube にファナリが持っているチャンネルから視聴できる。それらの映像では、摩天楼の下に駐車したトラックに据えられている彫刻に一般の人々や建設労働者が上がって、彫刻の労働者と並んで梁に座る光景が出てくる。ファナリのチャンネルは以下。"Sergio Furnari," last accessed on Nov., 12, 2014, <https://www.youtube.com/user/sergiofurnari>.
  - 6 ホテルに展示されている様子とその経緯については以下のサイトが参考になる。  
"Lunch atop a Skyscraper-Garden Place Hotel, Williamsville, NY - Exact Replicason Waymarking.com," last accessed on Nov., 12, 2014, [http://www.waymarking.com/waymarks/WMCWXX\\_Lunch\\_atop\\_a\\_Skyscraper\\_Garden\\_Place\\_Hotel\\_Williamsville\\_NY](http://www.waymarking.com/waymarks/WMCWXX_Lunch_atop_a_Skyscraper_Garden_Place_Hotel_Williamsville_NY).
  - 7 交通路の確保は、両地区間を流れるイースト・リヴァーの間に橋を架けるだけではなく、川の下にトンネルを掘って地下鉄を通すことも重要な作業だった。両地区間を結ぶ念願の地下鉄は約5年をかけた難工事の末に1908年になってようやく開通した。こうした地下鉄や車、下水道などの各種トンネル掘りや、橋桁を支える土台設置のため川底で基礎部分を掘る工事を担ったのは「土掘り人」(Sandhogs) と呼ばれる特殊な労働者だった。複雑な地下鉄網が張り巡らされ、数々の巨大吊橋が存在するニューヨークにあって、この土掘り人達も鉄骨組立工と並んでニューヨーク特有の存在と言える。土掘り人については拙稿「ブルックリン・ドジャースを探して—労働民衆史から捉えたブルックリン・ドジャースとその移転」を参照。
  - 8 2010年に完成し、ブルックリンでの高さ第1位となったのは高層マンション Brooklyner で、高さはウィリアムズバーグ貯蓄銀行を1m上回る157m。
  - 9 エンパイア・ステイト・ビル (第3位、381m、1931年)、クライスラー・ビル (第5位、319m、1930年)、70パイン・ストリート・ビル (第9位、290m、1932年)、トランプ・ビル (第10位、283メートル、1930年)。
  - 10 この他、エンパイア・ステイト・ビルの頂点にテレビ放送用のアンテナを設置する工事を担ったエド・クレアリーによれば、高層ビルの建設現場では強風に加え、意外にも大量の虫の発生にも悩まされたという。夜間作業の際の光が原因と思われるが詳細は不明。Interview with Edward Cleary, Sr., Nov. 30, 1980, Tamiment Library & Robert F. Wagner Labor Archives, New York University. (以下、TLRFWLA, NYUと略記)。なお、同ビルの建設過程では30名以上が落下事故で死亡した。
  - 11 Interview with Robert Walsh, by Janet Greene, Oct. 3, 2001, TLRFWLA, NYU.
  - 12 この時の様子はタリーズが著書の中で詳しく記している。Gary Talese, *The Bridge: The Building of the Verrazano Narrows Bridge* (New York: Walker and Company, 2003), especially, chapt 6.
  - 13 "Who We Are," Ironworkers, accessed on Oct. 14, 2014, <http://www.ironworkers.org/who-we-are>.
  - 14 なお、この橋は現在でも全米最長の吊橋の地位を保ち続けている。なお、世界最長の吊橋は日本の明石海峡大橋。
  - 15 Talese, *The Bridge*, preface.
  - 16 Ralf Blumenthal and Charles V. Bagil, "As Hard Hats Volunteer in Rubble, City's Building Boom Falls into Doubt," *New York Times*, Sept. 15, 2001.
  - 17 "from NYC IRON MEN," The Weather Channel, accessed October 12, 2014, <http://www.weather.com/tv/tvshows/ironmen>.
  - 18 Clayton Knowles, "All Major Buildings are Said Oppose Trade Center Plan," *New York Times*, March 9, 1964.
  - 19 "Trade Center Foes are Head in Court," *New York Times*, Jan. 22, 1966; Terence Smith, "Critics of World Trade Center Voice their Protest at Hearings," *New York Times*, May 14, 1966.
  - 20 Murray Schumatch, "TV Group Objects to Trade Towers," *New York Times*, Feb. 22, 1964; Smith, "Critics of World Trade Center Voice their Protest at Hearings." 様々な形で抵抗を試みたエンパイア・ステイト・ビルであったが、大勢は変わらず、アンテナはWTCに移設されることが決定した。Martin Arnold, "TV Stations Shift form Empire State to World Trade Center," *New York Times*, March 19, 1967.
  - 21 Terence Smith, "Tobin Charges City Seeks \$3 Billion to Clear Center," *New York Times*, June 8, 1966; "Hughes Criticizes City on Trade Center Stand," *New York Times*, June 10, 1966.
  - 22 Terence Smith, "City and Port Authority Mired in Deadlock on Trade Center," *New York Times*, June 15, 1966; "Lindsay Assails Charge by Tobin," *New York Times*, June 16, 1966; "World Trade Center Deadlock," *New York Times*, July 16, 1966.
  - 23 Terence Smith, "Construction Unions Plan One-Day



- 
- Strike in City,” *New York Times*, May 24, 1966.
- 24 Regular Membership Meeting, March 15, 1966, Building and Construction Trades of Greater New York (hereafter, BCTC), TLRFWLA, NYU; Meeting of the Executive Board, Sept. 1966, BCTC, TLRFWLA, NYU.
- 25 Terence Smith, “Agreement Near on Trade Center,” *New York Times*, Aug. 3, 1966; “City Ends Fight with Port Body on Trade Center,” *New York Times*, Aug. 4, 1966.
- 26 “Gov. Hughes Approves World Trade Center,” *New York Times*, Aug. 9, 1966; Terence Smith, “Mayor Signs Pact on Trade Center,” *New York Times*, Jan. 26, 1967.
- 27 全米女性法センター (National Women’s Law Center) によれば、1978年に同組織が掲げた建設業における女性の割合6.9%という目標は未だ遠く、2010年で2.6%であり、その数字は1983年時の割合と比べて全く同じものだとし
- ている。このことから考えれば、建設労組内により多数の女性を受け入れる課題の重要性は明確である。National Women’s Law Center Fact Sheet, “Women in Construction: 6.9% is not Enough,” May, 2012.
- 28 Patrick McGeehan, “New York City’s Unionized Workers Are Mostly Minorities, a Study Shows,” *New York Times*, Sept. 3, 2013.
- 29 Krista Carter, “The Construction Industry: Where the Minority Has Become the Majority,” *New York Observer*, Dec. 21, 2011.
- (長野県短期大学 多文化コミュニケーション学科  
国際地域文化専攻)  
(連絡先 〒380-8525 長野県長野市三輪8-49-7  
TEL 026-234-1221 FAX 026-235-0026)  
(平成26年10月1日受付、平成26年11月28日受理)
-